The Pacific Society

太平洋戦史研究部会報告(3)

太平洋戦史研究部会第3回セッション

昭和十九年二月のトラック空襲

——『トラック空襲』(その一)——

講師 竹下高見 元海上自衛隊幹部学校教官

とき 昭和六十一年十一月十日

ところ 日大法学部六号館会議室

日本海軍の最重要基地

お手元に「トラック空襲講義資料」それから「南西太平洋方面一般図」と「トラック空襲さる」という三つの資料がお配りしてございます。

この「トラック空襲」は海上自衛隊の幹部学校の依頼で、私が執筆いたしました『世界海戦史概説第四巻』の「太平洋方面の海戦」というものの中からコピーしたものでございます。

トラックはご承知のとおり、一九四四年の二月十七日と十八日、米空母部隊の空襲を受けまして、大損害が発生しました。その約二カ月半後の四月の二十九日と三十日にも空母部隊の空襲を受けました。それからこの間の三月以降六月まで、ソロモン方面及びマーシャル方面を基地といたします大型爆撃機B—24の空襲を、ほとんど連日トラックは受けております。

さらに十月になりますと、サイパンとグアムに超大型爆撃機B—29が進出いたしまして、日本本土爆撃に先立って、訓練を兼ねてトラックの爆撃をいたしまして、終戦まで約三十回のB—29の爆撃を受けております。

このようにトラックは、二月十七日、十八日の空襲を皮切りに終戦まで空襲を受け続けたわけでありますが、一般に「トラック空襲」といわれるのは、二月十七、十八日の最初の空襲でございます。

この最初のトラック空襲で受けました損害は、太平洋戦争で日本海軍が被った損害のうち、ミッドウェー海戦、それからガダルカナル攻防戦の敗北によります損害に次いで大きなもので、太平洋戦争の敗戦を早めたといっても

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

過言ではないと思います。この最初のトラック空襲によりまして、日本海軍はラバウルからすべての飛行機を引き揚げまして、南東方面の防備体制は崩壊いたしました。

このため、マッカーサー将軍のフィリピン進攻に道を空けることになったわけでございます。また日本国内の戦争指導にも影響を与えまして、政戦略の調整をはかるという名目で軍部大臣が統帥部長を兼ねることになりまして、東条総理大臣兼陸軍大臣が参謀総長を、島田海軍大臣が軍令部総長をそれぞれ兼ねるという異例な事態になったわけでございます。

トラックは連合艦隊の根拠地でありましたばかりでなく、南東方面——日本海軍はラバウル、ソロモン、東部ニューギニア、この方面を総称して南東方面と呼んでおりました——トラックは、この南東方面に対する一大補給基地になっておったわけでございます。

この日本海軍で最も重要な基地トラックが、空襲を受けるようになりますまでには、それなりの理由があります。

第一次大戦と日米関係の緊張

トラック空襲そのものにつきましては、いまお配りしました資料に書いてありますので、本日はトラック空襲の背景となりました南洋群島をめぐります戦前からの日米関係及び開戦後からトラック空襲までの太平洋戦争の概要をお話申し上げまして、時間があればトラック空襲を補足させていただくというふうにしたいと思います。

トラックは南洋群島のほぼ中央にありまして、世界でも有数な艦隊泊地でありました。マリアナ諸島、西カロリン諸島、東カロリン諸島、マーシャル諸島、これからなります南洋群島は、赤道以北の旧ドイツ領でありまして、約千四百の小さな島からなっております。そしてミクロネシアの大部分を占めております。

この南洋群島は第一次世界大戦の勃発に際しまして、日本が日英同盟のよしみによって、積極的に参戦いたしまして、ドイツの東洋艦隊を捜索するのを兼ねて艦隊を派遣しまして、一九一四年十月に占領したものであります。

日本海軍のこの南洋群島の占領というのは、日露戦争のあとから、中国問題をめぐって悪化しつつありました日米関係をも考慮して行われたのではないかというふうに考えられます。

海軍の政策決定の中枢であった当時の海軍軍務局長は、日本海軍を代表する戦略家であります秋山真之少将であります。

南洋群島は第一次世界大戦の終結後のベルサイユ講和条約の締結及び国際連盟の誕生によりまして、日本の委任統治領となりました。

アメリカの大統領ウィルソンは、ベルサイユ会議で南洋群島の日本への委任に、強く反対いたしました。その理由は南洋群島は経済的な価値はなく、軍事的価値だけであり、日本がこれを支配することは、米国からフィリピンに至る海上交通を遮断し、フィリピンの防衛を事実上不可能にするというものであります。これは地図をご覧いただければわかると思います。

しかし、ウィルソンの主張はイギリス、フランス、イタリア、ソ連の反対で実現しませんでした。これら四カ国と日本の間には、秘密協定がありまして、すでに南洋群島の日本への委譲を承認済であったといわれています。

日本は南洋群島を手に入れたことによりまして、赤道以北の西太平洋を支配する立場に立ちました。その中に西太平洋の奥深くフィリピンとグアムがアメリカの領土として、孤立することになったわけであります。このため南洋群島はアメリカのフィリピン防衛上の障害となりまして、南洋群島を占領してフィリピンへの海上交通を開くことが米海軍の基本戦略となったわけでございます。

一方、日本海軍はフィリピンとグアムの占領を目指すことになります。

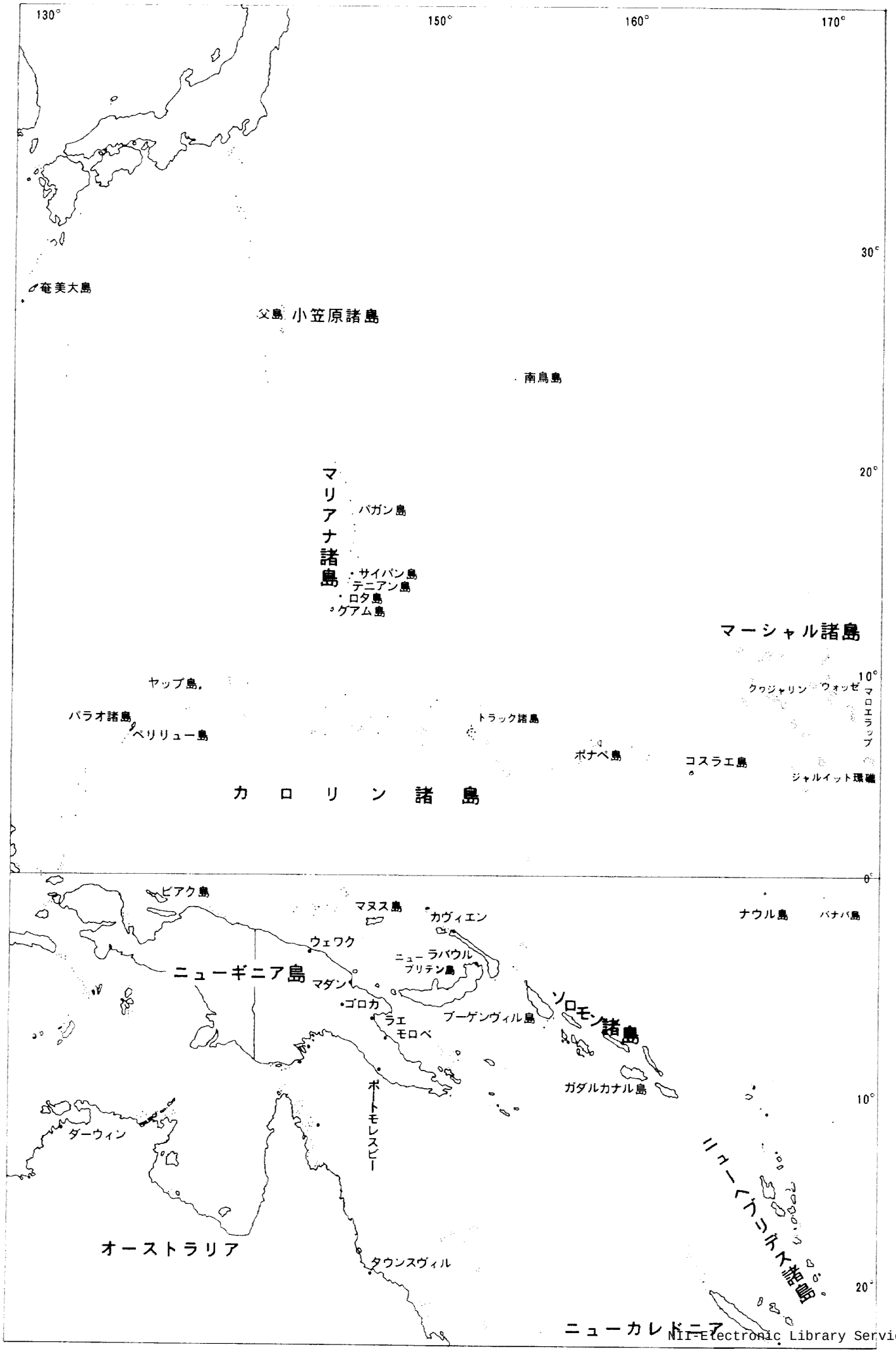
国際連盟脱退とワシントン条約破棄

この南洋群島は国際連盟規約によりまして、陸海軍の根拠地の建設、あるいは築城など軍事施設を設けることは禁止されました。アメリカは国際連盟に入りませんでしたので、日本との間にヤップ条約を締結いたしまして、国際連盟規約により定められた南洋群島の防備制限は、アメリカに対しても日本は義務を負うことになったわけでございます。

第一次世界大戦後に起こりました日米英間の海軍軍備競争を制限するため、米国の主張によりまして、一九二二年、ワシントン条約が締結されました。そして英米日三国間の主力艦の保有比率は五・五・三に決まりました。そしてその条約の付帯事項といたしまして、日米英三国の太平洋諸島における防備の現状凍結が決まりました。この防備の現状凍結というのは、日本から提案したものだといわれております。

ワシントン条約の締結と同時に、日英同盟も解消されました。主力艦の保有率が米英に対して少ないこと、そして日英同盟の解消ということで、日本海軍では国防の危機が叫ばれ、条約に対する批判が巻き起こったわけでございます。

NII-Electronic Library Service



NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

日本は一九三三年の三月、満洲問題をめぐりまして、国際連盟に脱退を通告いたしました。そして二年後の一九三五年三月には、これが効力を発生しまして、国際連盟規約による南洋群島の防備制限の義務はなくなりました。次いで一九三四年十二月、日本はワシントン条約の破棄を通告いたしまして、二年後の一九三六年には海軍軍備の無条約時代に入りました。この年の七月には、日中戦争——支那事変でございますが——が勃発しております。

防備制限期間中、南洋群島には、道路とか、港湾、あるいは漁業施設の整備がある程度行われたり、あるいは民間用の小型飛行場や、水上機の基地、通信所などの建設が進められましたが、軍事施設は全然つくられておりません。そして防備制限が撤廃され、軍備条約がいま申し上げましたように無条約時代に入り、支那事変が勃発し、日米関係が緊張し始めました一九三六年から一九三七年にかけて南洋群島の飛行場適地の調査や、港湾調査などが開始されました。

一九三九年の十一月には、南洋群島防備のための第四艦隊が創設されました。南洋群島の飛行場は大部分が開戦前年の一九四〇年秋に建設に着工いたしまして、翌一九四一年の春に概成しております。

開戦時にあった南洋群島の陸上飛行場はパラオのペリリュー、トラックの竹島、マリアナ諸島のパガン、サイパン、テニアン、マーシャル諸島のクェゼリン環礁のルオット、マロエラップ環礁のタロア、それからウォッゼ、この八カ所でございます。このほかに水上基地が数カ所整備されました。

これらの南洋群島の飛行場の整備は日本海軍の対米戦略構想を背景にして整備されたものであります。

日米海軍の戦略構想

次は、「日米海軍の戦略構想」でございますが、日露戦争の終結二年後の一九〇七年に日本で初めて帝国国防方針が制定されまして、ロシアに次いで米国が第二の想定敵国に指定されました。次いでワシントン条約成立翌年の一九二三年には帝国国防方針の第二次改正が行われまして、ロシアに変わって米国が第一の想定敵国になりました。

当時の日本の防衛計画は国防方針に基づきまして、国防所要兵力、用兵綱領、これが定められまして、用兵綱領に基づいて、陸海軍の年度作戦計画が作成される仕組みになっておりました。

国防方針制定初期の海軍の年度作戦計画は、資料がなく明確ではありませんが、進攻してくる米艦隊を日本本土近海で邀撃決戦するというもので、連合艦隊のその時の集結地は、奄美大島に予定されておりました。

現在、作戦計画の本文が残っております一九三六年度の帝国海軍作戦計画によりますと、開戦初期の第一段作戦で、東洋所在の米艦隊を撃滅し、東洋海域を制圧すると共にフィリピンとグアムを攻略する。そのあとの第二段作戦で太平洋を渡洋進攻してくる米主力艦隊を途中で極力減殺し、東洋海面において艦隊決戦によって撃滅するというもので、いわゆる邀撃作戦、艦隊決戦思想であります。

当時予定されておりました決戦海面は、大体小笠原諸島以西の日本本土近海であります。連合艦隊の集結地は奄美大島から沖縄など、南西諸島方面が予定されておりました。

その後、防備制限条約の撤廃、それから陸上航空基地の発達によりまして、南洋群島の軍事的価値が非常に高まりました。そして先程申し上げましたように、南洋群島に飛行場の建設計画が進められるにつれまして、基地航空機の傘のもとにおける艦隊決戦という思想が生まれまして、開戦二年前の一九三九年ころには決戦海域はこれまでの小笠原諸島以西の海域から、マーシャル諸島周辺海域に推進されることになりました。これに伴いまして、連合艦隊の前進根拠地も、奄美大島からトラックに予定され、南洋群島が対米作戦の重要な地域になったわけであります。

一九三九年九月、ヨーロッパで第二次世界大戦が勃発いたしました。このような国際情勢の変転に応じまして、これまでの対米作戦計画というのは、対米英蘭戦争計画に発展いたしました。

開戦直前の一九四一年の十月に発令されました対米英蘭戦争帝国海軍作戦計画、これでは第一段作戦において、フィリピン、グアムの攻略のほかにマライ、それから蘭印——これは現在のインドネシアでございますが——の攻略、ラバウル攻略、それからハワイ作戦、これが加えられました。第二段作戦は伝統的な邀撃作戦、艦隊決戦であります。したがいまして、第二段作戦では米艦隊が主敵であったということは、これまでと同様でございます。

米海軍の対日戦略構想

次は米海軍の対日戦略構想でございます。

日本海軍の対米戦略構想がフィリピン、グアムを攻略した後に西太平洋でアメリカ艦隊と決戦するという邀撃作戦、艦隊決戦思想であったのに対しまして、米国の対日戦略構想は、ちょうどこの逆でありまして、太平洋を積極的に渡洋進攻して、日本艦隊を撃滅して、フィリピンを防衛するというものであります。

米国は日露戦争が勃発いたしました

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

一九〇四年、非常時に備えるために色別計画（カラープラン）と呼ばれる一連の戦争計画を策定いたしました。日本の国防方針制定のちょうど三年前でございます。この色別計画の想定敵国は英国が赤、黒がドイツ、緑がメキシコ、オレンジが日本でございます。このうち最も重要視され、そしてまた絶えず改正が加えられましたのは、日本との戦争に備えるためのオレンジ計画でございます。

アメリカでは日露戦争における日本の勝利、それから一九〇六年にサンフランシスコで起きました日本学童に対する人種差別問題、これに対する日本の反発などから、一九〇七年には、日本との戦争が切迫したというふうに受け取られました。この時に、アメリカで問題になったのは、最近手に入れたばかりのフィリピンを日本からいかにして守るかということでした。

ご承知のとおりフィリピンは一八九八年にアメリカが米西戦争でグアムと同時に獲得したものでございます。

このため、米国の陸海軍統合会議は一九〇七年の夏、オレンジ計画の検討を行いまして、大統領に対して、速やかに艦隊を東洋に派遣するとともに、フィリピンの陸海軍部隊をスービック湾の海軍基地の防衛配備に付けるよう勧告いたしました。

しかしながら、日本の戦力及び日本からフィリピンまでの距離からみて、増援部隊と艦隊がフィリピンに到着するまで、アメリカは西太平洋で防衛態勢をとらざるを得ないだろうという結論になりました。このことがその後アメリカの対日戦略の基本になったのであります。

アメリカではその後、数カ月かけてオレンジ計画の再検討を行いまして、フィリピンに兵力を派遣すると同時に、太平洋全般の優勢を維持するという見地から、真珠湾に海軍基地を建設するという方針を一九〇八年に決定いたしました。

先程申し上げましたウィルソンが日本に対する南洋群島の委譲に反対したというのは、いま申し上げましたようなオレンジ計画が背景にあったわけでございます。

第一次世界大戦のあと、南洋群島が日本の委任統治領になりまして、さらにワシントン条約が成立し、一九二四年に改正されましたオレンジ計画の骨子は、艦隊が到着するまでマニラ湾を確保する、そして日本の占領を防止するために機を見て増援部隊をフィリピンに送る。さらに米艦隊は渡洋進攻して米国からフィリピンへの海上交通線上にあります南洋群島を速やかに占領するというものでありまして、この中にはトラックも含まれております。

その後、ヨーロッパにおける独伊両国の勢力の拡大、それから独伊枢軸協定の締結、極東におきましては日中戦争の勃発、それから日独伊三国防共協定の締結、中国における『パネー』号事件の発生など、国際情勢の緊張に応じまして、一九三八年二月にもオレンジ計画の改正が行われましたが、その骨子はこれまでと変わりませんで、太平洋方面に不測の事態が起これば海軍は日本に対する攻勢作戦を開始し、まず、南洋群島に作戦の重点を施行する。次いで積極的に推進しまして、太平洋を横断する。経済圧迫と並行いたしまして、これらの攻勢作戦によって日本を屈伏させ、極東における米国の権益を確保するというものであります。

レインボー計画の制定

次に制定されましたのは、レインボー計画でございます。このレインボー計画というのは、ヨーロッパで戦争の危機が切迫いたしました一九三九年の六月、米陸海軍統合会議は、大西洋、太平洋同時戦争の勃発に備えて、オレンジ計画と区別するためにレインボー計画と名付けた一連の戦争計画を開発いたしました。

オレンジ計画というのは日本に対する攻勢作戦計画であったのでありますが、レインボー計画で重視されましたのは、西半球たるアメリカ自身の防衛であります。

レインボー計画は予想されるヨーロッパ方面の情勢に応じまして、レインボー一からレインボー五まで五つの計画になっておりました。たとえばレインボー五というのはあとからお話しますが、これは日本との実際の戦争勃発時の戦争計画になったものでございます。

このレインボー五というのは、米国が英仏両国と連合して戦争をすると想定する。この場合、西半球の防衛、これはアメリカ大陸の防衛でございますが、西半球の防衛を確保するとともに、米軍を速やかに東大西洋とヨーロッパ大陸及びアフリカに投入いたしまして、独伊両国を屈伏させるために、連合国と協力して攻勢作戦を実施する。ヨーロッパ方面の情勢が、米海軍部隊を対日攻勢作戦に使用できるようになるまで、太平洋方面においては、戦略姿勢をとるというものでございます。

オレンジ計画は太平洋重視、レインボー計画は大西洋・ヨーロッパ方面重視というものでございます。

一九三九年の九月、ヨーロッパで第二次世界大戦が勃発いたしました。翌一九四〇年五月には、ドイツが西部攻勢を開始しまして、ベルギー、オランダを蹂躙、英軍はダンケルクから撤退し、六月にはフランスが降伏いたしました。

米国は日本が蘭印方面に進出するのを警戒いたしまして、太平洋艦隊をハ

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

ワイに常駐させ、そしてこれをまた公式に発表いたしました。そして七月には、太平洋、大西洋、両洋艦隊法というのを成立させまして、艦隊兵力の七〇%増強に着手いたしました。この中には、空母十二隻、新式戦艦七隻の新造が含まれておりまして、この空母があとからトラックを空襲することになります。

フランスが降伏しました後、英国はドイツとの航空戦に勝利をおさめまして、ドイツは英本土上陸を断念いたしました。そこで米国は英国と連合して戦争をするという方針を決めまして、米英両国の幕僚がワシントンで三カ月にわたって協議しまして、一九四一年三月、ABC—一と呼ばれる米英幕僚協定を締結いたしました。このABC—一というのは、ドイツをまず打倒する、そのために米国の主要軍事努力を大西洋方面に指向するということを決めました具体的な米英の連合戦争計画であります。

一方ABC—一は、米国が連合を予定しておりましたフランスが脱落いたしましたほか、先にアメリカで計画いたしましたレインボー五と同じ情勢になったわけでございます。

そこで米国は一九四一年の五月、ABC—一に基づいて戦争をするということを決定いたしまして、陸海軍統合作戦計画レインボー五、それから海軍基本戦争計画レインボー五というのを開発いたしました。そしてこれらの計画に基づきまして、一九四一年の八月、太平洋艦隊作戦計画レインボー五というのを策定いたしまして、戦争の勃発に備えたわけでございます。

レインボー五は、先程申し上げましたように、太平洋方面では戦略姿勢をとるということを決めております。しかし、太平洋艦隊の作戦計画レインボー五を実際に見てみますと、戦術的には攻勢を取りまして、英軍及びオランダ軍のマライ、蘭印方面の防衛を支援するために、開戦初期にまず太平洋艦隊はマーシャル群島を攻撃し、次いでマーシャル、カロリンの占領、それからトラックに前進根拠地の設定準備ということを決めております。

以上申し上げましたように、米国の対日戦争計画、あるいは対日戦略構想というものは、オレンジ計画、レインボー計画ともに南洋群島の占領が第一の目標であったわけでございます。

日米開戦

次は「開戦からトラック空襲までの太平洋戦争の概要」でございます。

開戦直前南洋群島には、井上成美中将の率います第四艦隊が集結しておりました。基地はトラックでございます。そのほか西カロリンのパラオにはフィリピン攻略部隊の第三艦隊が集結しておりました。それからマーシャル諸島のクェゼリン（Kwajalein）には潜水部隊主力であります第六艦隊が進出しておりました。もっとも潜水艦そのものはハワイ方面に出ておりましたので、六艦隊司令部、それから六艦隊の旗艦、補給艦艇、支援艦艇、これがすべてクェゼリンに集結しておりました。

太平洋戦争は一九四一年の十二月八日、日本軍の真珠湾攻撃、マレー半島に対する上陸作戦及びフィリピンに対する航空攻撃で開始されまして、予期以上の成果を納めましたことはご承知のとおりであります。

南洋群島方面では第四艦隊がグアム、それからウェーク島及びギルバート諸島のタラワ、マキンを占領いたしました。なおウェーク島の攻略は十二月十一日に行われました第一次攻撃は失敗いたしまして、ハワイから帰投中の空母部隊の第二航空戦隊の協力を得まして、十二月二十三日の第二次攻撃で占領したわけでございます。

次いで第四艦隊は、翌一九四二年一月の下旬、内地から進出してまいりました空母部隊の協力のもとに、ビスマルク諸島のラバウルとカビエンを攻略いたしました。ラバウル、カビエンの攻略はトラックの防衛が目的であります。

ウェーク島とグアム島の占領によりまして、米国からフィリピンに至る部太平洋の海上交通線は遮断されてまいりました。

なお、フィリピンが完全に日本軍占領下に入りましたのは、開戦六カ月後の一九四二年六月でございます。その時までコレヒドール、あるいはミンダナオ島などで抵抗が続きました。

アメリカの陸海軍は真珠湾が空襲を受けた直後に、レインボー五を発動いたしました。先に申し上げましたようにレインボー五により、米太平洋艦隊はマーシャル諸島を攻撃することになっておりました。

しかしながら、真珠湾の損害があまりに大きかったこと、あるいは真珠湾を攻撃した日本の空母部隊が、ハワイを再攻撃し、あるいは米国西岸やパナマ運河さえも攻撃を受ける懸念があるというふうに判断されましたため、翌十二月九日にレインボー五は取消されまして、太平洋艦隊はハワイの防衛及びハワイ～米国西岸間の海上交通保護に専念することになったわけでございます。

日本艦隊のハワイに対する空襲の、再攻撃の懸念が薄らいだ十二月の下旬アメリカはフィリピンに兵力を増援するためにオーストラリアに軍事基地を設置することを決めました。そして太平洋艦隊は、ハワイからカントン島、パルミラ島、それからトンガ、サモア

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

フィジー、ニューカレドニア、この南太平洋の海上交通線、いわゆる米豪連絡線の防衛に主要努力を傾注することを決めました。

このうち特に重視されましたのは、サモア、トンガ、ニューカレドニアであります。そして強力な防衛兵力と飛行機を配備することといたしまして、十二月下旬からこれらの島に兵力増援輸送を開始いたしました。

また、日本のラバウル進出によりまして、脅威を受けはじめましたオーストラリア、それからニューギニアのポートモレスビー、ここにも飛行機を送っております。

米空母の日本軍前線基地空襲

アメリカ艦隊が米豪連絡線の防衛と並行して行いましたもう一つの作戦は、空母による日本軍前線基地に対する空襲であります。真珠湾でアメリカの戦艦部隊は全滅いたしましたが、真珠湾にいなかった空母三隻は、生き残りました。

日本海軍の真珠湾攻撃により空母の威力の大きいことを改めて認識いたしました米海軍は、艦隊を空母中心に再編成いたしまして、空母中心に巡洋艦、駆逐艦などを加えまして、三つの空母機動部隊を編成いたしまして、サモア、ニューカレドニア方面に対する兵力の増援輸送を支援いたしますとともに、日本軍の前線基地に対する奇襲攻撃を開始いたしました。

このために、一九四二年の二月一日には、マーシャル諸島の大部分の日本軍基地が空襲を受けました。二月二十日にはラバウルが攻撃（未然に阻止）を受けました。それから二月二十四日にはウェーク島が、さらに三月の四日には南鳥島が空襲を受けました。

六日後の三月十日には日本軍が上陸いたしました直後のニューギニア北岸のラエ、サラモアが同じく空母機の攻撃を受けました。四月十八日には、ご承知のとおり東京が空襲を受けたわけでございます。

このような空母の奇襲攻撃と並行いたしまして、アメリカ海軍は潜水艦をもって日本の船舶に対する攻撃も開始しております。

それからマライ、蘭印方面で連合軍が全面降伏いたしました一九四二年の三月、米英の連合軍は、戦略指揮区域を改正いたしまして、太平洋全域がアメリカの戦略担任区域に、インド洋方面が英国の戦略指揮区域にそれぞれ決定いたしました。

米国は自分の戦略指揮区域になりました太平洋方面をオーストラリア、フィリピン、蘭印、ニューギニア、ソロモン諸島、これらを含む南西太平洋方面と、その他の太平洋方面に二分いたしまして、それぞれ南西太平洋軍、太平洋軍、二つの軍を創設いたしました。そして南西太平洋軍指揮官には、フィリピンから脱出いたしましたマッカーサー将軍が任命され、太平洋軍指揮官にはニミッツ大将が任命されました。

マッカーサーの主要任務は、オーストラリアの防衛であります。ニミッツの任務は、南太平洋を通る米豪連絡線の確保、それから太平洋方面の日本軍基地に対する奇襲攻撃及び南太平洋方面から日本軍基地に対する大規模な上陸攻撃の準備というものであります。

失敗が続く日本海軍の作戦

次は日本海軍のミッドウェー作戦でございますが、真珠湾攻撃の成功によりまして、米艦隊が太平洋を渡洋進攻し、邀撃作戦、艦隊決戦が成立する算は当分なくなりました。

そこで日本海軍は、緒戦の成功を背景にいたしまして、先程申し上げました機動空襲を繰り返す米空母部隊の捕捉、それから米豪連絡線の遮断、これらを目標にいたしまして、第二段作戦として五月にポートモレスビー攻略作戦、六月にミッドウェー、アリューシャン攻略作戦、七月にニューカレドニア、フィジー、サモア攻略作戦、この三つの作戦を計画いたしました。

しかし、ポートモレスビー攻略は作戦途中で珊瑚海海戦が勃発いたしまして、中止されました。次のミッドウェー攻略作戦は、ご承知のとおり、主力空母四隻を失って、大失敗に終わったわけでございます。次のニューカレドニア、フィジー、サモア攻略作戦も支援兵力として予定しておりました空母がミッドウェーでなくなりましたので、これも中止されました。

米の本格的反攻始まる
トラック、連合艦隊の基地となる

そこで日本海軍は、空母兵力に替えて陸上基地航空機支援のもとにニューカレドニア、フィジー、サモア方面の攻略を計画いたしまして、一九四二年の七月、ガダルカナルに飛行場の建設を開始いたしました。また、空母支援のもとに海上から攻撃することにしておりましたポートモレスビーは、計画を変更いたしまして、陸上から攻略することとして、七月中旬に陸上部隊が東部ニューギニアのブナに上陸いたしました。

そしてこれらの作戦を遂行するために、七月中旬、第八艦隊が創設されまして、これまで第四艦隊が担当いたしました南洋群島方面、ビスマルク諸島方面、ソロモン、東部ニューギニア、この方面を二分いたしまして、第四艦隊は南洋群島方面の作戦を、第八艦隊

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

はビスマルク、ソロモン、東部ニューギニア方面の作戦をそれぞれ担当することになったわけでございます。

このビスマルク諸島、それからソロモン、東部ニューギニア方面を総称して、南東方面と呼んだことは、先程申し上げたとおりでございます。

第八艦隊はラバウルに根拠地を設定いたしました。

一方米国は、ミッドウェー海戦の勝利を機にいたしまして、日本軍に立ち直りの機会を与えないために、一九四二年の七月、ソロモン、東部ニューギニア方面からラバウル奪回を目標に反攻作戦を計画いたしました。そしてその第一段階の作戦として八月上旬、ガダルカナルに上陸いたしまして、日本軍が建設中の飛行場を占領いたしました。

連合艦隊は第八艦隊、第四艦隊、それから太平洋方面に展開中の基地航空部隊、これらをラバウルに集中して、南東方面部隊を編成いたしまして、陸軍の第十七軍と協力してガダルカナルの飛行場の奪回作戦を開始いたしました。

また、山本連合艦隊司令長官が八月下旬、連合艦隊の主力を率いまして、トラック南方海域に進出いたしまして、南東方面部隊のガダルカナル飛行場奪回作戦を支援いたしました。それ以後トラックが連合艦隊の前線根拠地になったわけでございます。

ガダルカナル飛行場の奪回作戦は、その後、第一次ソロモン海戦、第二次ソロモン海戦、南太平洋海戦、第三次ソロモン海戦など多くの海戦が生起いたしまして、この一つ一つの海戦には日本海軍は大部分勝利を納めたわけでございますが、この間に、多くの飛行機と艦艇を失いまして、ガダルカナルへの補給が困難になり、六カ月後の一九四三年の二月には、ついに撤退のやむなきに至ったわけでございます。

そのころ、連合軍は、東部ニューギニアでも攻勢を開始いたしまして、日本軍はポートモレスビー陸路攻略の基地となっておりましたブナも失っておりました。

ガダルカナル攻防戦の敗北の主な原因は、航空戦の敗北であり、飛行機の不足であります。

ガダルカナルを撤退いたしましたあと、日本の陸海軍はソロモン諸島の中北部及び東部ニューギニアのラエ、サラモア、この地区に防衛線を構築して防備に努めました。

一方マッカーサー将軍麾下の連合軍は、先に占領したガダルカナル及びブナを基地に十分な準備を整えまして、一九四三年の六月末、ソロモン、ニューギニアの二つの正面から、ラバウル奪回のための第二段作戦を開始いたしました。

そのころ、彼我の航空戦力比は十倍以上に拡大しておりました。連合艦隊は基地航空兵力の不足を補うために、空母搭載機を次々にラバウルの陸上基地に投入いたしました。しかし、それも山本連合艦隊司令長官の戦死に象徴されますように、航空戦に破れまして、二カ月後の一九四三年の八月には、中部ソロモンのニュージョージアと、それから東部ニューギニアのサラモアを連合軍に奪取されました。

このような情勢において、日本軍が警戒いたしましたのは、連合軍がダンピール海峡を突破しまして、ニューギニア北岸に沿って西に進みフィリピンに侵攻するのではないかということでした。

一方そのころ、いろいろな情報から米艦隊は空母を中心に急速に強化されつつあるということがわかりました。山本連合艦隊司令長官のあとを継がれました古賀連合艦隊司令長官は、この増強された米国艦隊が、現在攻勢中の南東方面とは別に、南洋群島を中心とします中部太平洋方面から攻撃してくることを最も警戒いたしました。

このため、古賀長官は一九四三年の八月、Z作戦計画と名付けました邀撃作戦、艦隊決戦計画を策定いたしまして、連合艦隊の決戦兵力をトラックに集結させ、米艦隊の中部太平洋方面の攻勢に備えるとともに、南東方面の防衛戦を支援する態勢をとりました。Z作戦という呼称は、日本海軍ではよく使われましたが、日露戦争時の日本海海戦の戦闘開始に当たり掲げられたZ旗が最初であります。

しかしながら、決戦兵力をトラックに集結させたといいましても、これまでのミッドウェーの敗北、それに続く南東方面における、特にガダルカナル攻防戦における兵力の消耗によりまして、決戦兵力は第一航空戦隊の空母三隻、戦艦三隻、巡洋艦、駆逐艦合わせて二十数隻、これだけに過ぎませんでした。空母は開戦時の三分の一以下の兵力であります。

Z作戦計画が発令されまして間もなく、九月上旬から十月上旬にかけて、中部太平洋の南鳥島、ギルバート諸島のタラワ、マキン、それからウェーク、これが米空母部隊の攻撃を受けはじめました。

十月上旬にも、米空母部隊来襲の算大という情報によりまして、古賀長官は、連合艦隊の決戦兵力を率い、十月十七日、トラックを出撃いたしまして、マーシャル諸島のブラウン（エニウェトク）に進出いたしました。そして米艦隊の来るのを待ちました。

日本海軍決戦兵力を失う

しかしながら、この時、米空母部隊

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

は来襲せず、古賀長官は十月二十六日にトラックに帰りました。ところが、その翌日南東方面では、連合軍がブーゲンビル島、ソロモン諸島の一番北でございますが、ブーゲンビル島の南端に近いモノ島に上陸を開始いたしまして、次いで十一月一日にはブーゲンビル島の南西岸のタロキナ（Torokina）に上陸を開始いたしました。

そのころ、連合軍は東部ニューギニア方面でもラエ、サラモアの防衛線を突破いたしまして、フィンシュハーフェン（Finschhafen）まで進出し、ダンピール海峡の確保も困難になっておりました。

このため、古賀長官は連合軍がモノ島とタロキナに上陸いたしました十月二十七日から十一月一日にかけまして、Z作戦に備えて温存しておりました連合艦隊の決戦兵力であります第一航空戦隊の飛行機隊と、巡洋艦、駆逐艦からなる遊撃部隊をラバウルに送りました。ラバウルに到着いたしました第一航空戦隊の飛行機隊は、十一月一日からラバウルの基地航空部隊と協力いたしまして、連合軍が上陸いたしましたタロキナ方面の艦船攻撃を実施いたしました。

三次にわたるブーゲンビル島航空戦が展開されました。しかしながら連合軍のタロキナ上陸を阻止できなかったばかりでなく、壊滅的な損害を受けまして、第一航空戦隊の飛行機隊は、十一月中旬トラックに引き揚げました。また、遊撃部隊もラバウルに到着をした十一月五日の朝、ラバウルが今度は米空母部隊の空襲を受けまして、これまた大損害が発生いたしまして、遊撃隊はその日のうちにラバウルを出発してトラックに引き揚げました。

第一航空戦隊の飛行機隊の損害は特に大きくラバウルに進出いたしました百七十三機のうち、トラックに帰ったのはわずか五十二機です。残存機の大部分は戦闘機であります。このため第一航空戦隊は搭載機の再建のために瑞鶴一隻と、戦闘機隊の約三十機をトラックに残しまして、他の母艦は内地に帰りました。

米海軍の中部太平洋攻略始まる

このように連合艦隊が決戦兵力を失ってしまった十一月下旬、ニミッツ提督の率いる太平洋軍は、古賀長官が恐れておりました中部太平洋攻勢を開始いたしまして、ギルバート諸島のタラワ、マキンに上陸を開始いたしました。ちょうど日本海軍が決戦兵力を失った時に、アメリカ海軍は中部太平洋攻勢を開始したわけでございます。

前に申し上げましたように、米海軍の対日基本戦略というのは、南洋群島を占領して日本艦隊を撃滅し、フィリピンへの海上交通路を開くことでした。しかし真珠湾の打撃によって、一時的に南太平洋を通ずる米豪連絡線の防衛に戦略転換いたしまして、次いでミッドウェー海戦の勝利を機に、南太平洋及びオーストラリアを基地に南東方面の攻勢を開始いたしましたが、艦隊兵力の増強を待って、南洋群島から攻撃を開始するという方針には変わりはなかったわけでございます。

アメリカは一九四〇年の七月、先程申し上げましたように両洋艦隊法を成立させまして、昼夜兼行の突貫工事で艦艇建造に努めました結果、新造空母エセックスが、一九四二年の十二月に就役したのをはじめまして、一九四三年の十二月には新造の艦隊空母七隻、巡洋艦改装の高速軽空母九隻、商船改装の護衛空母二十九隻、それから新式戦艦八隻、巡洋艦、駆逐艦合わせて百四十三隻という新たな艦艇を持つことになりました。飛行機も次々に更新されました。新鋭機に更新されております。

そしてこれらの艦隊空母と高速軽空母、新式戦艦、巡洋艦、駆逐艦、これは空母中心の高速空母部隊に編成されまして、搭載機は約八百機、攻撃力、防御力ともに強大でありまして、日本海軍の前線基地に対して、これまでのヒットエンドラン的な奇襲攻撃ではなく、連続した強襲攻撃が可能になったわけであります。

一方、日本海軍はミッドウェーの敗戦によりまして、初めて空母の重要性に気付き、その直後に新造二十一隻、他艦船からの改造八隻の空母を計画いたしました。そして直ちに着工したわけでございますが、トラック空襲四カ月後のマリアナ沖海戦にこのうち三隻が間に合ったに過ぎません。

ギルバート諸島の失陥

このように艦隊の増強が中部太平洋攻勢の背景になったわけでありますが、米国の軍事戦略は、ヨーロッパ方面と太平洋方面の兵力配分を調整するために、戦争中に何回か行われました米英両国の首脳会談によって決定いたしました。

中部太平洋攻勢を正式に決定いたしましたのは、ガダルカナルで勝利の見通しがつき、それからヨーロッパ方面では、北アフリカ上陸作戦が成功した一九四三年の一月に行われましたカサブランカ会談というのがありますが、ここで最初の中部太平洋攻勢を決定いたしました。

この会談ではヨーロッパ方面、インド洋方面、中部太平洋方面、いろいろありますが、中部太平洋方面につきましては、一九四三年の作戦としてガダルカナル及び東部ニューギニアからラ

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

バウルに向けて進撃するのと並行いたしまして、トラック及びマリアナに向けて進撃するということを決めております。

それから一九四三年の五月にワシントンで行われましたトライデント会談では、アメリカが日本打倒のための長期計画というのを提案いたしました。その骨子は南西太平洋方面と中部太平洋方面の双方から日本本土を爆撃するための基地を獲得することを目標といたしまして、中国沿岸に向けて前進するというものであります。この方針のもとに、中部太平洋方面では、マーシャル、カロリン両諸島の占領を決定いたしました。

次いで一九四三年八月、カナダのケベックで行われましたクォードラント会談、ここではヨーロッパ方面、太平洋方面の優勢を背景にいたしまして、先に米国が提案いたしました日本打倒のための長期戦略を改定いたしますとともに、先にワシントンで行われましたトライデント会談の決定をさらに拡大いたしまして、一九四三年から四四年に中部太平洋方面ではギルバート諸島、マーシャル諸島の占領、カロリン諸島のトラック、ポナペ、最後にはパラオ、またマリアナの占領、それから南西太平洋方面ではニューギニア西端のフォーヘルコップ半島までの進出、さらに中国からB—29による日本本土爆撃の開始、この三つを決めております。

米国の太平洋軍は古賀長官がZ作戦計画を発令いたしました一九四三年の八月上旬、中部太平洋攻勢の準備を開始いたしました。そしてギルバート諸島遠征部隊を編成いたしました。ギルバート諸島の攻略はマーシャル諸島攻略の足場にするためであります。

そして十一月十九日、二十日の両日、空母十一隻基幹の高速空母部隊をもってタラワ、ミレ、ナウル、ここにありました日本軍飛行場を徹底的に二日間にわたって反復攻撃いたしまして、日本軍の反撃を封じた上で、水陸両用部隊が十一月二十一日に、タラワ、マキンに同時に上陸を開始いたしました。

米軍がギルバート諸島遠征に準備いたしました飛行機は、空母機だけで八百五十機、それに陸上基地航空機三百機を加えまして、計千百五十機であります。

前に申し上げましたように連合艦隊は十一月上旬ラバウル方面で決戦兵力を失っておりました。このため南洋群島にあった飛行機は、空母機と基地航空機を合わせて、約百三十機程度に過ぎませんでした。このためわずかな水上兵力をもって米艦隊と艦隊決戦をできる状態ではありません。

それでも古賀長官は、米軍が上陸を開始しました十一月の二十一日に、Z作戦命令を発令いたしまして、飛行機と潜水艦をマーシャル、ギルバート方面に集中して攻撃させるとともに、タラワに増援兵力の派遣を準備いたしました。しかし、増援兵力が到着する前に、タラワ、マキンの守備隊は玉砕いたしまして、十一月下旬には、ギルバート諸島が米軍の手に渡ってしまったわけであります。

米軍のマーシャル攻略

米軍のギルバート諸島進出によりまして、次に米軍はマーシャル諸島に進攻してくることは必至の情勢になりました。

一方、南東方面におきましては、最後の防衛線でありますニューブリテン島の南西岸にあるマーカス岬に連合軍が十二月中旬に上陸し、次いで十二月下旬にはニューブリテン島西端のツルブ（Cape Gloucester 付近）に上陸いたしました。またこの間の十二月中旬以降は、ラバウルがタロキナを基地とする米軍機の大空襲を連日受けはじめております。

このようにマーシャル諸島、南東方面の双方から攻勢に直面いたしました古賀連合艦隊司令長官は、一九四四年の一月の上旬、連合軍の主反攻路線は、ニューギニア北岸経由、フィリピンに向うものであって、副反攻路線がマーシャル諸島経由であるだろうと、要するに主反攻路線はニューギニア・南東方面であり、副反攻路線が中部太平洋であろうというふうに判断いたしました。

そこで先程申し上げました瑞鶴の戦闘機隊、それから飛行機隊の再建訓練を途中で打ち切りまして、十二月上旬にシンガポールから急遽トラックに進出いたしました第二航空戦隊の飛行機約百機をラバウルに派遣いたしました。そしてラバウルで航空戦力を消耗した基地航空部隊の第二十六航空戦隊を再錬成のためにトラックに引き揚げさせました。

空母瑞鶴と第二航空戦隊の空母三隻、これは搭載機をラバウルに送りましたあと、再び飛行機隊再建のために内地に帰りまして、一月上旬にトラックに残ったのは、水上部隊だけであります。水上部隊だけでは米太平洋艦隊に対する決戦能力は全然ありません。そして決戦能力のない連合艦隊は当時石油が欠乏しておりましたトラックにおる必要はなくなったわけでございます。

そこで古賀長官は連合艦隊主力のトラックからの撤退、石油の入手可能なシンガポールに近いリンガ泊地での再建訓練を決定いたしまして、その第一陣として敷島部隊と名付けました戦艦、巡洋艦、駆逐艦、計十隻からなる部隊が一月三十日、トラックを出発いたしまして、パラオ経由リンガ泊地へ向か

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

いました。

ところが敷島部隊がパラオに向かいました一月三十日朝、今度はマーシャル諸島の各基地が米空母部隊の激しい空襲を受けはじめました。米艦隊がマーシャル諸島攻略を開始したのでございます。

マーシャル諸島に対する空襲は翌三十一日まで続きまして、米軍は二月一日にマーシャル諸島のほぼ中央にありますクェゼリン（Kwajalein）に上陸を開始いたしました。同時にまたマーシャル諸島の東端に近いメジュロ（Majuro）にも上陸いたしました。また、米軍は持ってきた予備隊をクェゼリンにおける日本軍の抵抗が少なくて、使用する必要がなければ、マーシャル諸島西端のブラウンにも投入して占領する計画を持っておりました。このブラウンというのはエニウェトクとも申します。核実験で有名なエニウェトクでございます。

米軍がマーシャル諸島攻撃に準備いたしました兵力は空母十二隻基幹の高速空母部隊と護衛空母、旧式戦艦、輸送船など三百隻からなる水陸両用部隊であります。上陸兵力は五万四千という兵力であります。

ギルバート諸島で米軍は非常に大きな損害を被りました。このためにマーシャル諸島のクェゼリン攻略開始に当たりまして、あらゆる方面で戦術的にも、また作戦的にも慎重で、兵力も大きくなっておりました。

当時、マーシャル諸島にありました日本側の航空兵力は第四艦隊の第二十四航空戦隊の飛行機約百機でありました。この百機は一月三十日の空襲で全滅してしまいました。古賀長官は三十日の朝、Z作戦用意を発令いたしまして、パラオに向かっていた敷島部隊をトラックに呼び返しました。

しかしマーシャル諸島方面の航空兵力が完全に失われた現在、わずかな兵力でクェゼリン奪回の見込みはなく、敷島部隊は翌二月一日再びトラック発パラオ経由リンガ泊地へ向かいました。そしてクェゼリンは二月七日、米軍の完全な占領下に入りまして、メジュロも米軍の艦隊補給基地になりました。

連合艦隊司令部のトラック撤退

敷島部隊が再びトラックを出発いたしたあと、トラックには旗艦武蔵と巡洋艦、駆逐艦からなる邀撃部隊だけが残りました。これら部隊が残ったのは、クェゼリンの守備隊が必死の戦闘を続けております時に、連合艦隊司令部が撤退するには忍びないという統率上の配慮と、東京から二月八日に天皇のお使たる侍従武官が連合艦隊司令部にお出でになるという予定があったためであります。

この間の二月四日には米軍大型機のB－24が、これはタロキナを基地とする飛行機でございますが、トラックに偵察に飛来いたしました。しかし、撃墜できませんでした。それでこれを機会に古賀長官は連合艦隊司令部のトラックからの撤退を決めまして、二月十日、武蔵と軽巡一隻、駆逐艦二隻を率いて、今後の作戦打合せのために、内地に帰りました。同時に遊撃部隊は同じく二月の十日、パラオに向けてトラックを出発いたしました。

以上申し上げましたような状況で、今度はトラックが二月十七日と十八日に空襲を受けたわけでございます。

以上が、トラック空襲までの太平洋戦争の概要でございます。

トラック空襲

少々時間がありますので、続いてトラック空襲の話を簡単に申し上げます。

トラックは付図にありますように、直径百三十キロ、周囲二百八十キロという大きな珊瑚礁に囲まれた環礁でございまして、この中に大小二百四十五の島が点在しております。先程申し上げましたようにトラックは、連合艦隊の前進根拠地であったばかりでなく、内南洋部隊（第四艦隊）の基地でもありました。

また陸海軍はガ島攻防戦が始まったところから、南東方面に全力を投入いたしましたので、その補給基地、後方基地はトラックになっておりました。したがいまして、陸軍兵力も海軍兵力も飛行機も全部トラックに一ぺん集めまして、そしてラバウルに送るという方法をとっておりましたので、連合艦隊の前進根拠地であると同時に、南東方面に対する一大補給基地になっておったわけでございます。

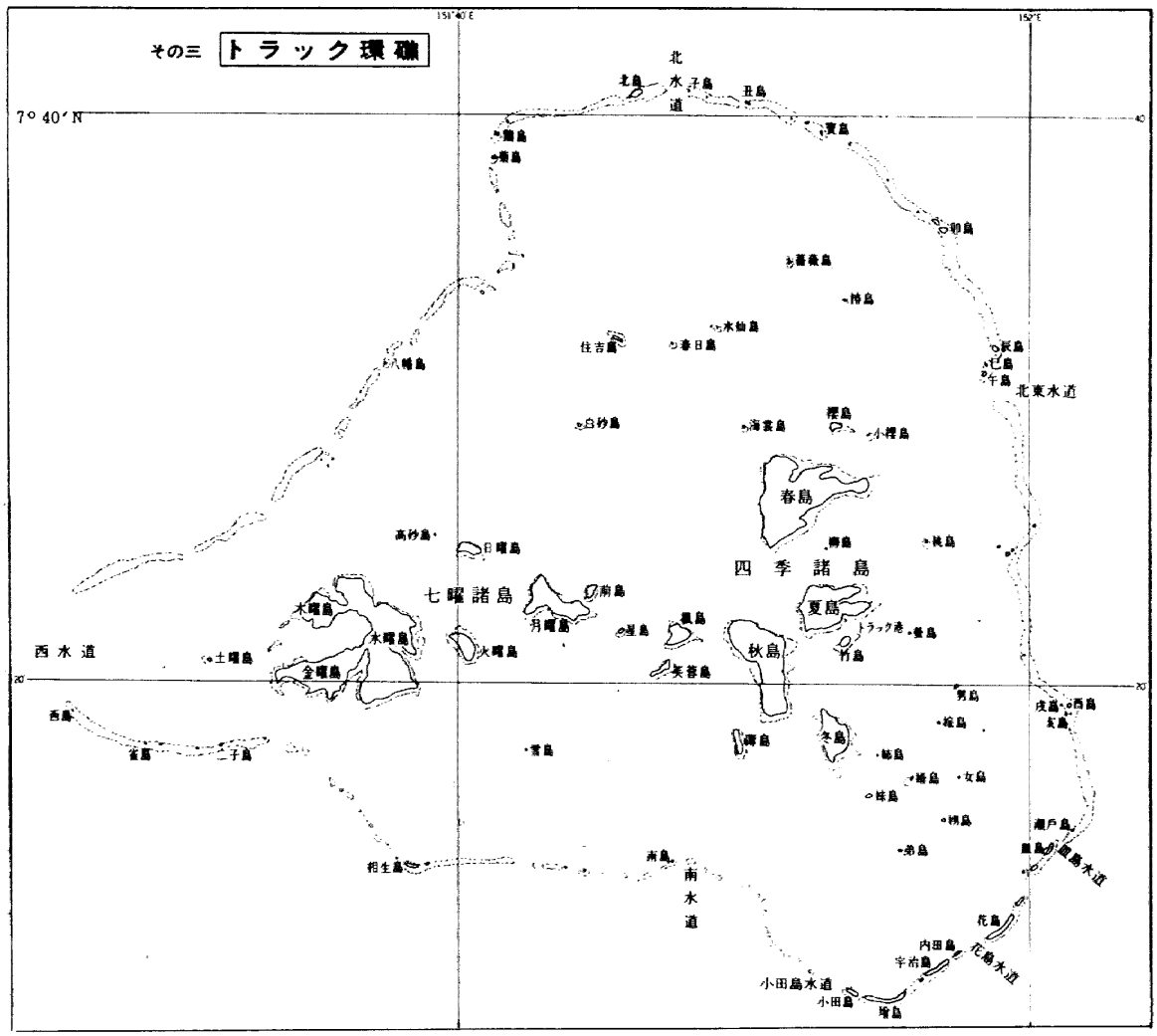
当時、ここの航空部隊は三つに分かれておったのでありますが、この第一番目のものは、第四艦隊の固有の兵力、次はラバウルから撤退いたしました酒巻宗孝中将の率います第二十六航空戦隊でございます。これは先程申し上げましたように、ラバウルで航空戦力を消耗いたしまして、再錬成のためにトラックに帰っておりました。それから三つ目は、南洋群島方面の飛行機が不足いたしましたためにインド洋方面から抽出いたしました航空兵力であります。

第一番目の第四艦隊の航空兵力は、主力たる第二十四航空戦隊がマーシャル方面でほとんど全滅し、ギルバート戦後、再建のためにテニアンに退いた第二十二航空戦隊の一部（陸攻隊と艦爆隊）がトラックに前進しており、司令部はテニアンにございました。

このように三系統の基地航空兵力がありましたが、トラック防空のための

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society



防衛庁防衛研修所戦史部『戦史叢書　中部太平洋方面海軍作戦〈2〉』（朝雲新聞社　昭和四十八年）の「付図第二」に基づき作成。

専任の戦闘機隊というのはなかった。

また、これら三つの航空部隊の先任指揮官は第二十六航空戦隊司令官の酒巻宗孝中将でございましたが、指揮系統は必ずしも明確でなく、トラック空襲後に中央で「T事件」として調査した結果、航空部隊の指揮関係は、「三つくらい独立？」し、敏活、統制ある作戦ができる状態になかったと報告されております。

レーダーもあんまりなかった。あっても探知距離が短くて、しかも通信が不備で、春島、竹島、楓島、これに連絡するのに時間がかかったということでございます。

それから当時の警戒体制にも、ある程度不備がありまして、前日に空母機の無線を傍受して、十六日未明に第一警戒配備が発令されたわけでございますが、索敵機が異常を認めなかったので、その日の午前中には、早々と解除されまして、乗員は外出しておった。それも戦闘機隊の配備は竹島にあったわけでありますが、竹島に慰安設備とか、宿泊設備等が少なくて、外出は夏島に行っておりました。

酒巻中将も空襲を受けた時、外出しておって、竹島にはおられなかったという状況でございます。

このような状況の下で、二月十七日午前五時の第一次空襲から午後五時頃まで、九回延べ四五〇機の空襲を受け、さらに翌十八日も早暁より三次にわたる空襲を受け、陸上、海上に前日に引き続いて大損害を被りました。

この二日にわたる空襲で、わが方は飛行機の損耗二百七十機（戦闘行動中七〇、地上二〇〇）、艦船沈没四十一隻十九万三千四百七十トンの大損害を受けたのでありますが、この沈没艦船の中には、そのころ非常に貴重になっておりましたタンカーが含まれております。第三図南丸一万九千二百九トン、神国丸一万二千トン、富士山丸九千五百二十四トン、このような大きなタンカーが沈没しております。

タンカーや商船を　なぜ避退させなかったか

そのほか商船もたくさん沈んだわけでございますが、考えてみますと、いわゆる連合艦隊の決戦兵力だけ撤退いたしまして、艦艇はある意味ではいたし方ありませんが、いま申し上げましたような大きなタンカー、それから商船、もちろんこれは南東方面、特にラバウルに対する補給など、いろんな状況もあったわけでございますが、これをトラックに残しておいた。なんで残しておいたんだろう。すでに敵の偵察も受けておりますから、そういうふうに考えるわけでございます。

そういう点から、当時の第四艦隊司

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

令長官小林中将の警戒体制に対するいろんな批判もあります。それと同時に、連合艦隊司令部、あるいは軍令部辺りが処置するべき問題があったのではないかというふうに思うわけでございます。

いま申し上げましたようなことは、次に三月三十日、三十一日にパラオが空襲を受けますが、同じような損害が出るわけでございます。その時もいま申し上げました非常に貴重なタンカー、商船が、パラオで空襲を受けて沈没をしております。

のちにマリアナ沖海戦では、決戦海域をどこへ持ってくるかということでいろいろ苦労するわけでございますが、一番問題になったのはタンカーが足らないから、どうしても連合艦隊はフィリピン海域、あとでタウイタウイが艦隊待機基地になりましたが、そこに持ってこざるを得ない。

しかし、いま申し上げましたように、タンカーはパラオで三隻、トラックでも三隻、小さな船まで入れますともっとあります。こういうのをトラックとパラオで失ったために、あとのマリアナ沖海戦でも非常に苦労した。そういうことは前もってわかってなかったんだろうか。あとからの批判でございますが、そういうふうに思うわけでございます。

司会（工藤） どうもありがとうございました。あと時間が少々あるようでございますので、ご質問ございましたら、先生に直接お願いしたいと思います。

質問 トラック空襲については、非常にたくさん疑問があるわけなんですが、最後に先生がおっしゃった連合艦隊が避退したのに、タンカーその他の艦船を置いておいた。パラオの空襲の時も、連合艦隊はヤップのほうへ避退しまして、それで米軍が思うようにパラオを空襲するわけですけれども、タンカーもそうですが、一部の巡洋艦なんかも残っていまして完全にやられてしまう。それからもう一つ、竹島、夏島あるいは楓島に滑走路があるのに、搭乗員はほとんど夏島に行っていたということも合点が行かない。

また、特に春島は非常に大きい島で、高い山もありますから、それこそ洞窟を掘って、飛行機を入れるようにしていたっていいと思いますし、人間を入れることもできたと思いますが、なんにもやらなかったですね。これは昭和十六年に井上成美大将が、四艦隊の司令官になって、その時、中央にいろいろ基地としての整備を要求したんだけれども、全然受け入れられなかったということを、戦後お話になったということを読んだことがあるんですけれども、これなんか本当にどんな要求をしたのか、正確に記録が残っておりますんでしょうか。

それから、先生は『太平洋方面の海戦』の中で、「小林中将が更迭されたと考えて差支えない」というふうにお書きになっていらっしゃるんですが、『戦史叢書』の「中部太平洋海軍作戦」を読みますと、かねて痔で転勤を申し出ていたんで、この更迭は責任を取らされたんじゃないということが書いてありますね（笑）。

それからこの空襲による大損害は、「T事件」といわれて大本営からも調査に行ったんですが、結局、うやむやになったわけですが、戦争が始まる前から第四艦隊の基地になり、その後は連合艦隊司令部の所在地にもなっていたのに、それが一回の空襲で、もうアッという間にやられてしまう。ほんとに腑に落ちないのですが、どういうことなんでしょう。

竹下 軍備制限条約がありまして、一九三六年ぐらいまでは全然軍備はできなかったわけですね。その後、艦隊の増強に主力を置いたために、陸上基地の防衛施設、まあ飛行場は建設されましたけれども、防備施設はあんまりされなかった。

石油をためるタンクもそんなに多くありません、トラックでも。というのは、私もそのとおりだと思うんですが、南洋群島を守るためには地上防備施設は必要ないと思うんです。ある程度なければいけませんけれども。先程申し上げましたように南洋群島を守るためには、日本艦隊が健在であれば、アメリカ艦隊は寄せ付けられないわけです。

日本艦隊が先程申し上げましたように非常に劣勢に陥りまして、総体比率が十分の一以下というふうになった時に初めて攻撃してくるわけですね。ですから日本艦隊が健在でありさえすれば、陸上防備にそんなに、陸軍ではありませんから、小さな島ですからあまり必要ないと考えた。それよりも、いわゆる海のほうでは制海権をしっかり持っておれば、ある程度の防備兵力があれば、艦隊の力によって防衛ができるというふうに思うわけです。

もちろん、防備の必要なことはわかりますが、実際問題として、一九四二年の八月にガ島攻防戦が始まりましてからは、ラバウル防衛その他の方面にトラックにありました高射砲とか水上砲とか、そういうものまで撤去して南東方面に持って行ったわけですね。

それと一九四二年の八月から九月にかけて、マーシャル諸島方面、それからナウル、オーシャン辺りまで、陸海軍の調査団が防備施設の調査をいたしまして、ギルバート諸島にしても、マーシャルにしても非常に防備が不備だという結論が出まして、防備の強化を

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

始めて、陸軍兵力も一応ギルバート辺りまで出すことが決まったわけです。

それにしたがいまして、防備はギルバート、それからヤルート、それからマーシャルの東端のほうにミレという基地がありますが、ミレにも飛行場建設が始まったわけですね。こういう方面に、いわゆる東のほうに防備の重点を施行いたしまして、トラックはあとになった。そしてまたそれだけの機材もあんまりなかったということではないかと思うんです。

質問　それから通信のことで、ひとつお伺いしたいんですが、少なくとも連合艦隊の司令部があった周辺の島々ですね、それこそ守るべき島々であったのに、その通信設備が不備であった、不完全であったと、そんなことはあり得るんでしょうか。

竹下　連合艦隊の旗艦自体が、非常に大きな通信設備を持っております。だから連合艦隊に対するものは旗艦から直接できるわけですね。それから陸上施設に対する不備というのは、第四艦隊の司令部から、春島、それから楓島、竹島、こういうものに対しては直通電話があってパッパッと通じるような状態にはなかったんじゃないかということだろうと思います。

大体、レーダーがあって、その警報によってすぐ飛行機は発進準備をし、発進するわけですけれども、レーダーそのものの管理が四艦隊の所属になっているわけですね。ですから、四艦隊を通じて、レーダーで探知したらそこの警備隊から航空部隊に連絡がくる。その間に相当の費消時がかかるわけです。

質問　ミッチャー提督の高速空母部隊はどっちの方向からきたんですか。

竹下　北東の方向です。北東の九十マイルぐらいのところから入っています。

質問　前日、天山九機、陸攻二機の索敵機を飛ばしているんですが、これはどの程度の距離を哨戒したんですか

竹下　艦攻が二百から二百五十マイルぐらいです。それから陸攻が最大距離七百マイルぐらいです。

質問　先生のお書きになった『太平洋方面の海戦』によりますと、前日、第一警戒配備をして、翌日攻撃されるまで、二十四時間以上あるわけですね。

空母部隊のスピードですと、千キロ近い距離を走ってくる。そうすると、その時に一回だけ索敵をして発見をしなかった、だからといって、すぐ第三警戒配備にするというのはいかがなものですかね。

それからもう一つ、塔乗員が乗機から離れてですね、いないというのもちょっと信じられないんですね。

竹下　第三警戒配備というのは、戦地における、いわゆる普通の配備ですね。だから、上陸が許されるわけですね。ですから竹島なんか、戦闘機隊の基地がありましたけれども、そこで楽しむには施設がありませんので、いわゆる上陸して、みんな夏島にランチで行ったわけですね。その点は確かに小林中将辺りの責任問題といいますか、酒巻中将辺りもやはり同じような責任問題があるんじゃないかと思うんです。

もっとも、酒巻中将はラバウルから、損耗した部隊を引き揚げてホッとして、第一線から帰ってきたという状況にあったわけですね。ですから、ある程度乗員をゆっくりさしてやりたいという気持は当然あっただろうと思います。そのような状況で空襲を受けたわけです。

アメリカは、トラックのことを日本のジブラルタルとか、太平洋のジブラルタルとか、いろんなことをいっておりましたが、実際は防備施設というのは、それらしいものはあまりなかった。先程申し上げましたように艦隊さえしっかりしておれば、トラックまでこられることはないわけですね。そういう考え方が、日本海軍の基本的な考え方だったんじゃないかというふうに思います。

防備をするに越したことはありませんし、その上に艦隊があればなおいいですけれども、やはり制海権という考え方が日本海軍にあって、そして金の重点は艦隊の建造に費されたということではないかと思います。

質問　というのは、防備をしようという気はさらさらなかったんじゃないか（笑）。と申しますのは、十九年の末期の段階で、硫黄島辺りに米軍機はしょっちゅう来るんです。陸軍は宿舎を地下につくっておりますが、それでも海軍は屋根付きのしかもピカピカのトタン張りで、いい木材でつくっているという事例がございますし、それから、飛行機を入れる掩体壕も不十分ですし、結局、みんな地下に建設されていない。

もちろん海軍は艦で戦うんですから、そこが正念場ですけれども、そういう観点からいうと、基地はどうしてもそういう点が弱かった。これは形而上の問題ではなくて、意識の問題じゃないかと思いますが。

竹下　まあ、防空壕をつくるとか、いわゆる飛行機の掩体壕をつくるとかいう問題は確かにあります。しかし、そこに大砲を据えるとか、あるいは大きな防御工事をするとか、築城をするとかいうような問題は、やはり中央の方針がなければできないと思います。

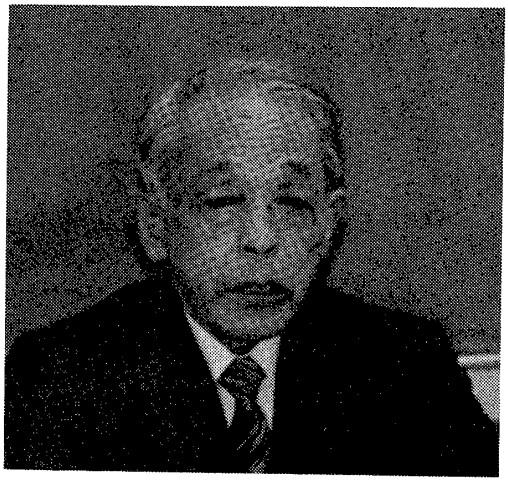
NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

質問　その同じつくるにしましても、たとえば高射砲なんかは、陸軍は穴を掘って、そこに据えつけるんですね。ところが海軍は平地につけるんですね。ですから、私は意識の問題だと申し上げたいんです。

竹下　やはり同じようなことは沖縄でもいえるわけですね。沖縄に上陸してくるというのがわかっていても大砲、いまも残っていますが、もうまっ平らなところに、なんにもないところに据えているわけですね。確かにそういう点はあると思いますね。

しかし、南西方面、豪北方面というふうに日本ではいっておりますが、蘭印の最前線などオーストラリアとの激しい航空戦を応酬したところでは、やはり相当な防備施設をつくっているわけです。ところがトラックは初めて敵の飛行機が偵察に飛んできたのが二月四日ですね。だから、あれっ、空襲を受けるのかという意識が、これで初めて生まれたんじゃないかと思うんですね。



竹下高見氏

ラバウルなんかは、陸軍部隊もそうですが、海軍部隊も地下道、地下壕を掘っているわけですね。だから、海軍の全体的な意識の問題というよりは、その場の空気にもよるんじゃないかと思うんですね。臨戦態勢に対する、トラックならトラックの位置というものがあったと思うんです。

トラック空襲があってから、一週間後の二月二十三日には、サイパンとテニアン、グアムが空襲を受けるわけですね。その直前に角田覚治中将という方が、内地から第一航空艦隊司令長官として来られるんですが、その時、相当歴戦の方ですから、現地を見て、こんな防備施設でどうするんだと、非常にびっくりされたという記録があります。

ですから、ラバウル方面の第一線から見たら、トラックの防備は戦争状態じゃなかった。意識的にもですね。というふうにいえると思うんですね。

質問　しかし、トラックとラバウルの間は、全部行ったりきたりしていたのに、どうしてトラックには前線の緊迫感が伝わらなかったのでしょうか。

竹下　塔乗員は行ききしていましたけれども、トラックにある警備隊とか、あるいは基地員とかいうのはなかなかそこまで行かないわけですね。しかし、確かにおっしゃるとおり、トラックとか、テニアンとか、サイパン辺りは、意識の問題もあると思うんですね。同時にやっぱり、さっきいったように防備施設というようなものは、中央の問題もあると思うんです。

私は、戦史部におります時に、小林中将に二回ほどなんとか聞き出そうと思いまして、お話伺いましたけれども、トラック空襲については一言もしゃべられませんでした。そのことから、『太平洋方面の海戦』の中では、「専任防空戦闘機隊の不在、所在航空部隊の不明確な指揮関係、多数商船隊の在泊など、むしろ連合艦隊司令部あるいは大本営海軍部が事前に適切に処置すべき問題が多かったように思われる」という表現になったわけです（笑）。

質問　前段のお話の中にありました例の昭和十七年の初期のアメリカの空母中心としたヒット・エンド・ランですね。これについては日本海軍はもう、本当に真剣に追っ掛けたんでしょうか。当時ビスマルク諸島方面攻略に参加した艦隊は、全部インド洋に行っていますね。

竹下　その当時、日本海軍は全部南西方面、蘭印攻略作戦、それからインド洋作戦、こういうふうに行っておりますから、全然もう見向きもしなかったわけですね。最後に、インド洋作戦が終わりまして、四月の十日に、第二段作戦計画というのが発令されて、空母部隊が内地に帰るんですが、その途中に東京空襲があったわけですね。

それで一応第五航空戦隊あたりがおって、一応南洋群島辺りに出ましたけれども、実際は補捉できる状態ではありませんでした。まあ、アメリカは、考え方としてはなるべく日本の艦隊を太平洋に引き寄せたいと、インド洋方面に対する救援、支援するために太平洋の方面に牽制したいという意味もあって、こういうような空襲を繰り返したわけですね。

しかし、日本のほうは、いま申し上げましたように、実際に動いたのは、二月一日のマーシャル方面空襲の時は、空母部隊も全然おりませんので、ただラバウルにおりました一部水上兵力が、南洋群島方面に回っております。第六戦隊とか、第十八戦隊とかがマーシャル諸島方面に出ておりますが、大きな兵力の移動というのは、南西方面の作戦が終わるまでできなかった。

しかし、そういう米軍の機動空襲が昂じて、東京空襲にでもなるんじゃないかという考え方が山本さんにありまして、つまり機動空襲が昂じて東京空

NII-Electronic Library Service

The Pacific Society

襲まで行って、陛下のお心を悩ますんじゃないかという考えが山本さんの頭の中にありまして、山本さんの主張によって、ミッドウェー作戦が行われるわけです。

もっとも東京空襲の前に、ミッドウェー作戦は決まっておりますけれども、二月一日からのいろんな空襲がミッドウェー攻略作戦を計画する背景にはなっていると、そういう意味でいま申し上げましたように機動空襲、ゲリラ空襲に対する日本軍の警戒というものは、ある程度はあったということはいえると思いますね。

質問　私の当時の記憶その他からみても、どうも日本海軍がやっぱり戦艦中心の考え方で、空母に対する攻撃とか、あるいは空母を何隻つくるとかに、あんまり重きを置いていなかったような印象があるんですが。

竹下　そうですね。実際、日本海軍が空母の建造に力を入れだしたのは、ミッドウェー敗戦後です。アメリカはもう一九四〇年の両洋艦隊法が成立した直後に、艦隊空母十二隻を発注しているわけですね。金の問題もあるでしょうけれども、そのころ日本軍は大和、武蔵をつくっておったわけですね。もう一隻、信濃というのがありますけれども、やはりあれも同じようなものだったわけですね。

ミッドウェー海戦後つくった空母で、実際は海戦に間に合ったのは、先程申し上げましたように大鳳というのが一隻できまして、それはマリアナ沖海戦で沈みました。

質問　内田先生は戦争中にトラックにいらしたようでございますけれども、現地の空気はいかがでしたでしょうか。

内田　私は昭和十八年の五月までトラックにいて、あとは帰ってきましたので、戦争は全然知らないんです。

すでに話がありましたけれども、トラックまで入り込まれるということは、少なくとも昭和十八年の春ごろまでにおいては、全然考えてなかったですね。

しかし、やはり物がないですから、注文しても、こないですね。飛行機さえあのころ、時々輸送用の空母が三十機ばかり戦闘機を運んできましてね。それで私なんかわからないものだから、ああ、きたきたと思っていましたら、内田さん、あれがきたらしばらくこないんですよ、あれだけなんですよという話だった。そういう調子でした。飛行機そのものさえも数が少なくなって、すでに行動力の底が見えておったんですね。

質問　いまのお話でちょっと思い出したんですが、『ニミッツの太平洋海戦史』をみますと、このトラック空襲の直前に、トラックにはだいぶ新しい飛行機が着いていたんですね。

竹下　あそこに航空廠がありましたから、いわゆるラバウル方面に飛行機を送るために、航空廠に飛行機がきたわけですね。それを受け取って二十六航空戦隊は、その飛行機で錬成訓練をやるという計画だったわけです。

この飛行機がトラックにくるまでには計画は随分前からできておるわけですね。したがって、空襲を受けた時は、実際に搭乗員がおって戦闘できるような状態にあったのは、ラバウルから帰ったわずかな搭乗員と飛行機だけだったわけです。

また、インド洋方面からきていた第五五一航空隊天山隊は、非常に活躍した経験もあり、実力もあり、相当訓練を向うでやっておりましたが、しかしもう、離陸する前に、もう敵の飛行機が上に来ておったというんですから、警報施設の不備ということになると、非常に大きいと思いますですね。

質問　警報施設の不備という面もあったかも知れませんが、搭乗員の大部分が泊りがけで夏島に遊びに行っていたというのは、何とも解せないんです。夏島から竹島なんていうのは本当に手を伸ばしたら届くぐらいのところですが、やっぱり海で隔てられていますから、走って帰るわけには行かないわけですから（笑）。

竹下　トラックには陸上飛行場が三カ所ありました。竹島と春島と楓島です。楓島は一番最後にできたんです。竹島が一番先にできたわけですが、充分な居住施設とか、慰安設備とか、休養設備というのはなかったわけですね。

質問　夏島が非常に近かったからでしょうか。しかし、二日前にはポナペが空襲を受けていますから、もうちょっと緊張していてもいいような気がするんですが。

竹下　やはり前進基地というよりは、後方基地という考え方があったんじゃないかと思いますね。なお、ポナペを空襲したのは、ギルバード諸島を基地とする陸上大型機B—24です。

〈文責・中島　洋〉

NII-Electronic Library Service